「男っぷりと女っぷりの間」

理工学部　末吉恵美さん

加藤（俊一）研究室でビジネス特許出願へ向けた企業との共同研究チームで活躍中だ。同期生十数人の中の花一輪。大きな声ではいえないけれど、「感性モデルを利用したインターネットショッピングシステム」――個々の嗜好や消費性向を微細な感性レベルからモデル化して、商品紹介などにつなげるものらしい。

あなた自身の感性モデル、自己紹介を。「うーん」とうなって、

「声がデカくて、元気。〝オトコっぷりのよさ〟では負けないつもり」

だなんて。明るい、威勢がいい。

研究室では、女の子モードと戦闘モードを使い分け、研究のヤマ場となれば、上下ジャージ姿だそうだ。取材のこの日、教授はおっしゃった、という。「戦闘服はやめておけよ」

で、ごらんの女っぷり…でしょ。

昨年の夏、ニュージーランドにホームステイした。「バンジージャンプもやりましたよ」。モチロン、という口ぶりで。高さ、じつに47メートル。「度胸も満点」の証である。

就職活動もそれなりに。テレビ局技術職の入社試験では最終面談までいった。博士課程前期（修士）への進学を決めたのは、やはり「研究の楽しさ」のようだ。ヒューマンメディア工学の立場から「人にやさしい技術」を追求する加藤研究室の理念と雰囲気、そこでの先端的な共同研究の手応え。

「毎日、夜遅くまで研究することも、ぜんぜん気になりません」。共同研究のほうは、すでに2度学会発表を行っている。

眉をのびのびと開いて、言った。

「自分が作ったものを人に使ってほしい。世間の人に使ってもらえるのが夢ですね」

「異文化熱情「諦めたらオワリ」」

商学部　シディキ・ムニブさん

「まぁイイカラ、イイカラ～」

ついコーヒーまでごちそうしてもらった。初対面から明るくオープン。そしてパワフル。なにかインタビューもあちらのペースで。

シディキ・ムニブさんはパキスタン籍。とはいえ日本語はペラペラ。フツーの日本の学生の格好をし、和食の好き嫌いもほとんどない。ただ納豆だけは……。

「大キライ！ここ強調しておいてネ」

小学―高校はインターナショナルスクール。英語、パキスタン語、日本語の3カ国語を操るスーパーボーイ時代。

卒業後、ムニブさんは日本の大学に挑戦。日本語能力を高めるのが目標だった。しかしスクール出の受験は当時認められにくく、特別に協議してくれたのは、わが中央大学だった。その時から中大は好印象。

入学してからもそれは変わらなかった。

ムニブさんは、サークル2つにこの『Ｈａｋｕｍｏｎちゅうおう』の学生記者もやっていた。つまり、私たちの先輩でもある。大学の職員によく接し、その手厚いサポートを感じたという。

生徒がヤル気なら、教職員も喜んで力を貸す。彼の熱意あればこそである。

就職活動では、大学や企業のセミナーなどに積極的に参加。幅広く、

「諦めたらオワリ」

と自分に言い聞かせ、８０社もの企業を受けたという。これは大学生活の中で1番大きなチャレンジだった。

そして昨年6月に日立製作所へ就職を決めた。最先端の技術と、「大きい中で働く」ことにワクワクするという。ムニブさんのチャレンジは就職後も終わることはない。今ではシスアドを目指して勉強中である。

大学生活に後悔はない、とキッパリ言う。

「失敗を恐れずチャレンジすること。在校生にも是非オススメしたい。なぜならそれによって得られる達成感、これが大事だから」

「アテネへ駆ける中大の星」

文学部 藤原正和さん

年の初めの箱根駅伝。テレビにかじりついて「C」のゼッケンとタスキに声援を送ったものである。なかでもことしは「花の2区」。ついに先頭集団をとらえ、3人が並んだ。21キロ地点で山梨学大・モカンバが脱落。中大・藤原、駒大・松下が併走する。そしてラスト1キロでライバル松下を、余裕をもって、振り切った。みごとな区間賞。「藤原さ〜ん」と思わず叫んだ1人である。「果てしなくステキ」でした＝**終面グラビアに写真**。総合5位ではあったけれど。

駅伝競技部主将、あの藤原選手が、4年間を振り返る。

「入学当初はそれほど強い選手として入ったわけではないので、同期の他の選手に負けたくないという気持ちでしっかり練習しました。1年の冬に初めて箱根の5区を走り、区間賞を取ったのですが反省点も多かった。また練習を積んで2年で箱根の往路優勝を果たしたことや3年生次にユニバーシアードで金メダル取れたのはうれしかったですね。4年になり主将として最後の箱根に2区で出られたこと、区間賞を取れたこともすごくよかったと思います」

――陸上と学業との両立は大変でしょう？　特に苦労したことは？

「友達に助けてもらったり先生によくしていただいたので、楽しく4年間を過ごすことができました。ただ毎年、箱根駅伝が終わってから後期試験が始まるまでほとんど時間がないので切り替えが難しく、その点では苦労しましたね」

――卒論も昨年12月中に提出済みなんですってね。

「はい。『任那日本府について』というテーマで卒論を書きました。いま、北朝鮮の問題が取りざたされている中で、古代の日本と朝鮮半島との関係や比較ができれば面白い論文が書けるんじゃないかと思い、テーマに選びました」

――4年間で一番辛かったことは？

「うーん……。いや、毎日キツイ練習を重ねて来ていたので、特別つらかったということはありませんでしたよ。逆にすごく印象深かったのは、最後の箱根が終わって最初にゼミに行ったときに、ゼミの仲間たちがみんなでお祝いしてくれたことです。びっくりと同時にとてもうれしかったですね」

――でも、やはり練習中心の生活では自由に遊ぶ時間もほとんどなかったのでは？

「そうですね。もちろん遊びたいと思うときもありました。ただ入学時から仲のよかった仲間が、それぞれ将来の夢とか資格とか目標に向かってがんばっていたので自分も励まされました。自分が何のために大学に入ったのか、と考えたら自分の場合は陸上だった。周りの友達のおかげでがんばれた部分は大きいですね」

――卒業後は？

「1年のときに中大の主将をなさっていた小川先輩がマネージャーをしている△ホンダ▽で陸上を続けていこうと考えています。これからはマラソンを中心に活動していくのですが、競技者としてマラソンでも世界1を目指していきたいです」

――後輩たちへのメッセージを。

「中大はとても楽しい大学だと思います。僕には充実した4年間でした。どの学年の人も30歳や40歳になってからも充実した大学生活だったと言えるように毎日を大切に過ごしてください。陸上部への応援もお願いしますね」

エネルギッシュな競技者としての姿と、一人の学生としての明るい姿。まさに「トップアスリート」のオーラが放たれていた。

今月2日には、びわ湖毎日マラソンで2時間8分12秒、堂々3位。初マラソン日本最高、日本学生最高記録。アテネへ！中大の星は駆ける。

「アテネめざし「継続は力」」

法学部　谷口晋矢さん

シドニー五輪日本代表で、日本選手権でも優勝経験を持つ個人メドレーのエース。中大水泳部が誇る世界の谷口選手もこの春新たな門出。

「中大での4年間はたくさんのことを学ぶことができた年間でしたね。水泳は一人で闘うスポーツというイメージが強いと思うんですが、中大の水泳部に入って、チームが一丸となって闘うという姿勢に触れ、その中で協調性を学べたことは大きな収穫でした。それに協調性の中で築かれていく仲間との信頼関係。水泳を通してたくさんの人と関わっていく中で、感謝の心を学びました」

一番印象に残ったことは？

「やっぱり(シドニー)オリンピックに出られたことですね。それに決勝に残れたこと。ただ体格の大きな外国人選手にプレッシャーを感じて自分の精神的に弱い面が出てしまったという意味では悔いが残った部分もありますが……」

卒業後は？

「自衛隊の試験を受けてきたところです（取材はその翌日だった）。自衛隊に決まれば、練習は中大で行いながら水泳を続けていきます。シドニーで悔いが残ってしまった分、オリンピックの借りはやはりオリンピックで返したいと思うのでアテネを目指してがんばります」（その後、自衛隊体育学校入りが正式決定した）

後輩に一言残すとしたら？

「僕は座右の銘が『継続は力なり』なんです。5歳から水泳を続けてきた僕には、この言葉が一番当てはまる。ひとつのことを続けていくことってすごく難しい。でもだからこそそれを諦めずに、ひとつのことを突き進んで欲しいと思います」

さらにインカレ目下9連勝中の水泳部へのエール。

「ことし優勝すれば、日大の10連覇の記録に並ぶ。さらにどんどん記録を塗り替えて、中大水泳部は最強を示していって欲しいですね」

「亡き父の思いも胸に」

商学部　飯村　勝さん

あろうことか取材の待ち合わせに遅刻したわたし。それを

「遠いでしょ～」

嫌な顔一つせず出迎えてくれたのが、飯村勝さんだった。でも同じ横浜市民。飯村さんこそ多摩キャンパスは遠くないのだろうか……。

「高校も片道1時間半はかかっていたからね」

全然気にしていない様子。わたしなんてあと30分多くかかっていたら、学校まで嫌いになりそうなのに。

球技が大好き。球技のサークルに入り、同じ4年の友だちと参加したスポーツ大会2002では、バレーボールで優勝した。一方、

「小さい頃やっていた水泳と合気道は、好きになれなかった」

なるほど、チームプレーが好きなのだ。仲間を大事にする、友だちが多い。卒業旅行は、サークル、ゼミ、バイトそれぞれでの友だちと計画中。

「海外に行きたいな～」

海外へは、大学に入ってから中国へ兄と母一緒に3人旅行を1回しただけだ。父は、飯村さんが高校生のときに他界した。

亡き父は自営業で、デザイン系の会社を営んでいた。しかし、経営の知識が乏しかったためうまくいかず、倒産した。それを見て思った。

「頑張る経営者を助けたい。それも父のような中小企業の」

その思いから就職を決めたのが、不動産担保融資会社のアサックス。はじめは第一希望の某大手銀行から内定をもらったので、そこに入社するつもりだった。でも、大企業のシステムに組みこまれると、客一人ひとりと接する機会は少なくなる。対して総社員数70人ほどのアサックスだと、それができるだろうし、なにより客層は会社を経営する人が多くなる。飯村さんの夢により近づけそう。

武勇伝も好きという飯村さん。何か大きな仕事をしてくれそうだ。

就活50社、悔いない自己哲学

総合政策学部 中井美佳さん

「120%の努力で80%の力が出せるところまでもっていったんですよ」

彼女は半年間で50社という膨大な数の会社を回った。業種もテレビ局から旅行社など様々だ。中には、落ちて当たり前と、記念受験したところも。「何事もせっかくやるのだから、楽しくやりたいじゃない！」

昔から人と違うことをするのが好きだったらしい。人を笑わせようと、常にネタを考えているような。就活も同様で、心がけたのは印象に残るような面接だ。

ある面接では、生協で傘を購入し、それにその会社の新聞記事を貼り付けてアジサイに見立て、手作りのカタツムリ付きの指し棒で指しながら、会社への熱意を表したものである。

「私はね、ほとんどOB訪問もしなかったんですよ。でも企業研究は他の誰にも負けないくらいやってきたつもりだから、自信ありましたね」

就職活動に悔いなし。好きなだけ好きな会社に行って、ひとつひとつの面接に全力投球。

「自分はスポーツをずっとやってきたわけでも、他の人より特に秀でた部分があるわけでもない。いわゆる、平凡な人生。でも、凡人だからこそ凡人にしかできない就職活動をしようと思ったんです」

そして彼女は2つの会社から内定をもらった。一つは大手音楽会社、もう一つは旺文社。彼女は、後者を選んだ。

「私は、英語を勉強して、それを生かしたくて。でも○○（大手音楽会社の名前）だと、いざというときに自分の声が上に届かないかも、と思って、出版に決めました」

最後の最後まで、あくまで「自分らしさ」を貫き通した、これはもう見事な生き方哲学。

剣道「学生日本1」の集中と自信

法学部 野口貴志さん

4歳のときから剣道を始めた。「はじめに姉がやっていたんですよ。それについていくような感じだった」とふりかえる。いらいの剣道の道。

ことし、学生日本1になった。

「やっぱり優勝したときはうれしかったですよ」。すこし照れたように笑みがもれる。素朴な語り口にもおのずと落ち着きがある。

通っていた中学は、スポーツが盛んではなかった。まわりの友達はみんな遊んでいた。そんななか、ひとり剣道に励んだ。「なんで自分だけ？」と何度も思ったという。それでも日曜日も休まず練習だけは続けた。結果、中学のときにも日本一に。

「やはり高校時代が一番厳しかった。先生も、練習も。切り返し、面打ち、小手打ち。いまでも基本が大切なんです」と言う。「剣道をやっていて1番学んだことは忍耐力ですね」

大学でも1日2時間の練習を重ねた。教職もとっている。教員をめざしていま猛勉強中だ。

家族は姉と両親。遠い九州の地にあって、あまりうるさく言うことなく、いつも陰で支えてくれる存在だ。ずっと寮生活をしていたが、最近ひとり暮らしを始めた。寮のときは門限が10時半。2年のときが、コタえたらしい。

寮と聞くと、先輩――後輩関係が厳しそうな気がしますが？　「そうでもないですよ。以前よりは先輩、後輩の境界が小さくなってきた」と野口さんの弁だから、安心する。

大学4年間を振り返って――「全国各地から来ているいろんな友達にめぐり会えた。剣道をしていて本当によかったですよ。充実した学生生活でした」

精神の集中、揺るぎない自信。言葉を裏打ちして余りある「学生日本1」の栄光である。

充電して社会の海へ

法学部 磯田順子さん

中大水泳部は、背泳ぎの中村真衣さんや平泳ぎの田中雅美さん、自由形の源純夏さんなど、多くのオリンピック選手を輩出した部である。そして、磯田順子さんも平泳ぎ種目で、シドニーオリンピックの日本代表、01年福岡の世界水泳などでも活躍をみせた。そんな彼女も昨年11月に水泳部を引退した。

水泳部で過ごした4年間。

「これまでは本当に水泳中心の生活でした。毎日家とプールの往復だったし、学校も授業が終われば すぐに帰る、そんな日々でした」

男女関係なしの練習。「4年生のときは、男子の中で女子は私一人。一日中男の子としか話せなかった日もありました。でも、ツライ練習もトレーニングもずっと一緒で、そのぶん刺激になることもたくさんありました」と語る。

高校まではスイミングスクール、「水泳部」自体が初めのことだった。

「先輩がいて、後輩がいて、男子もいて。そんな新しい環境で、自分にも責任感が生まれました。チームで練習すること、チームで戦うことの大切さを学びました」

男子は寮生活だが、彼女は一人暮らし。どんなに練習で疲れていても、毎日自炊は必ずしていた。料理はなかなかの腕前らしい。水泳部女子の先輩たちのこと。「大学に入る前からJAPANのメンバーとしてよくしていただきました。女の子同士ということもあって、切磋琢磨、お互いを向上しあえる存在でした」

1年大学に残り、普通の人と同じように進路を決めていきたい、という。将来の夢はキャリアウーマン。

トップスイマーは充電して社会の海へ泳ぎだす。

就職戦線、奇縁あり

法学部 菊地亮太さん

放送研究会に所属して、ネットワーク運営委員長をつとめた。

醒めている。「就職活動といっても、自分の行きたいと思った企業しか受けるつもりもなかったし、落ちたら落ちたで来年またやればいいだけのことだ、くらいにしか考えていなかった」と言う。

「就職活動は日常生活のいわば、イレギュラー的存在でしかなかったから面接で落ちたことよりも、車で事故を起こしたことの方がショックでしたね」

とはいえ、受けたところは自分の全てをぶつけたこと無論である。

ある会社の面接はグループディスカッションだった。16人が無作為に「賛成」と「反対」のグループに分かれ、互いに自分たちの意見を述べるという、ディベート形式のもの。いざ、自分の順番がきて発表したものの、相手グループはなぜか自分だけをターゲットに猛烈に攻撃する気配。

「ああ、これはだめかなぁ、と思ったけど通っちゃったんですよ。形はどうあれ、言いたいことを言い切ったのがよかったのかな？ まあ、次の面接で落ちちゃったんですけどね」

切り替えは早い。グループディスカッションの経験から自分の話し方を見直し、見事に次に受けた会社で内定を得た。

その内定者説明会のこと。突然声をかけられた。「前に会いましたよね？」。よくよく見れば、以前グループディスカッションで自分をメッタメタにしたうちの一人だった。あるまいことか、悪夢は蘇り、一触即発！？ いやいや、「ああ、あの時の」となごやか～な雰囲気で「同期の桜の腐れ縁」をたたえあったそうだ。

「卒業までにやりたいこと？そうですね、サークル活動と学内のネット事情に目を向けてみようかなと思ってますよ」

放送研のホームページは学友会サイトから見ることができます。一度ご覧あれ。

花の女子アナ、少し長めの泣き笑い話

法学部 小林杏奈さん

昨年12月、巨人・阿部選手の講演会で彼に花束を渡す際、壇上で吉本芸人も真っ青なコケっぷりを披露してしまった美しい女性（本人いわく「つまずいたらどうしよ～なんて言ってたんだけど、まさか本当にやってしまうとは……！」）。彼女こそ4月から大阪・よみうりテレビで花の女子アナとなる人である。しかし彼女、当初は吉本興業……いや違う、弁護士志望だったのでした。

「2年生までは司法試験ひとすじ。伊藤○にも通っていました。一応アナウンス研究会に所属はしていたものの、アナウンサーは憧れで終わる予定で、アナ研名物？発声練習にもロクに参加してません（笑）。まさにユーレイ部員でした。だけど、いざアナウンサー試験の直前になったら、やっぱり挑戦したくなって……」

この挑戦に至るまではやはりさんざん迷ったそうだが、自分の可能性を試してみたい。それが一番の理由だったと彼女は言う。

「そうは言いつつ、マスコミの予備知識すらほとんどない状態で試験に行きました。もう、試験を受けながら実地で勉強していったという感じです。そんな状態じゃ受けるそばから落っこちるのも当然で……辛くて辛くて一度はアナウンサーをあきらめました。ええ、完璧に一般企業志望に切りかえて。だけどOB訪問の時、先輩に言われたんです。『お前が本当にアナウンサーになりたいならあきらめるな』と。就活中はよく泣きましたが、その時も泣いちゃいましたね。でもそのおかげで、後悔しないように最後までできるだけのことをしよう！って決意できたんです。……とはいえその時点で2月。ほとんど募集なんて締め切ってたんですが、3月によみうりのエントリーがありまして。そこからはもう一直線。歯ブラシについてトークをするというお題の時は、実際に歯を磨いて見せたりもしました。面接官も、他の受験者もびっくり（笑）」

そして、1000人の中からたった1人の栄冠。

「内定した時も泣きましたよ。この1度の嬉し泣きのために就活中何度も泣いてきたのかも、なんて。あきらめないで本当によかった。でもいまふり返ると、辛かったけど楽しかった！　いろんな人に出会えたし、助けてもらって、私は縁にも運にも恵まれてましたね」

ナミダをふいて、後輩へのメッセージ。

「う～ん、就活だけじゃなくて全てに言えることだけど、やっぱり自分の可能性をせばめないでほしいな。勉強でもサークル活動でもね、大学の内にやれることは何でもやってみてほしいですね。大学はいろんな人がいるし、勉強（だけ）するところではないと思うから。もちろん就職がゴールってわけではないですし。私ですか？　これから3年は仕事ひと筋の予定だけどその後は結婚なり何なり……。そしたらまた弁護士をめざそうかな、なんてね♪」

可能性を狭めずに、有限実行。元気な人である。

「それにしても、今度は私がOB訪問される側ですか。そうですね、もし大阪まで来てくれるなら中大生大歓迎ですよ！　私は別に後輩泣かせませんから（笑）」

記者もじつはこの日何度か、思わず涙が……いやそれは冗談です……よね小林さん♪

「野球部女子マネの「お茶の心」」

商学部　星野延江さん

中大硬式野球部といえば、ジャイアンツの阿部慎之介補手を輩出した中大の誇る体育連盟の一つである。4年間、その野球部の女子マネージャーをつとめた。

「マネージャーとして『選手を支えてきた』とは思っていません。むしろ私の方が選手から励まされることも何度もありました」と語る。女子マネは主に会計や名簿など事務的な仕事をするのだという。

サークルではなくあえて体連野球部を選んだワケは？

「本当に野球に打ちこむ選手と一緒に野球をやりたかったんです。もともと野球が大好きでしたから」

彼女自身も高校時代は水泳のインストラクターのアルバイトをしていたくらいのスポーツ熱中派である。

マネージャーとして心がけたことは？　「試合に負けたときや思うように成績が伸びないときなどは選手一人ひとりにあわせて『話を聞く』ということを大切にしました。彼らの話を聞いているうちに、私も視野が広くなったと思うし、人の気持ちをわかってあげられるようになったような気がします」

中大で過ごした4年間を振り返って、明るい顔になる。「いろんな人に出会えたし、部活でも、それ以外でも本当に充実していました」

卒業後は、お茶メーカーの伊藤園に就職が決まっている。「マネージャーで学んだ経験を大切にして、これからは消費者の気持ちを受けとめて、お茶以外にも消費者が求めているものを提供していきたいですね」

最後に一言。「春・秋の神宮球場の試合に、皆さん応援にきてください」

「なぜなら「世界の山」があるから」

法学部　宇佐美靖さん

4年の夏にチヨ・オユー（8201m）という山に挑んだ。とてつもなく大きかった。仲間と3人で登ったが、宇佐見さんは7200mでリタイヤした。高山病による無念のリタイヤではあったが、大きな足跡を残した。

1年間のうち、移動日を含めて1000日以上、山に登る。部活一筋の大学生活だった、という。

大学生活を、人生をも大きく揺るがした出来事がある。

2年のときだった。部員4人で横尾に向かった。雪崩が起き、部員の一人を失った――。先輩2人は部を去った。宇佐美さん一人しか残らなかった。1年間は活動休止状態になり、事後処理に追われた。

3年になって活動を再開した。山の怖さと山に登るという覚悟を本当の意味で知った。チベットにあるメラピーク（6473m）制覇はその年だった。

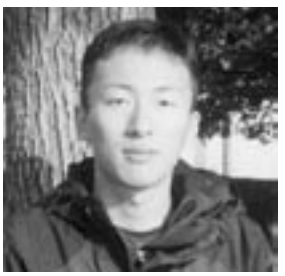
中学・高校ではそれぞれ陸上・剣道に励んだ。どれも「個人種目」だ。「登山も個人の資質によるところが大きいと思います。状況判断や機転を利かす場面でもそうなんですよ」と宇佐美さんは話す。

山だけではない。「いろんなところに行ってみたい」と毎年、必ず1度は海外に行く目標を立てた。

これまでイタリアのローマ、バチカン市国、トルコのイスタンブールに。トルコでは「トロイの木馬」も見た。

「海外に行くと、自分のいた生活の位置づけが変わるんです」

大学に席を置き、また新たな一歩を踏みだす。「自分の目標がないと大学に来る意味がない。いろんなとこから人が集まるから新しい発見があるんですよ」



「考える人」が選んだ道

法学部 幅 肇さん

あのY田電器でアルバイトを始めてはや3年目。接客のベテランの幅肇さんである。穏やかな口調や温厚な雰囲気はそのせいだろうか。

「どうもはじめまして」

深々とお辞儀をされて、

「あのぅ」

質問を切り出したのも幅さんの方だった。

「なんでボクなんですかねぇ……」

今回の取材に抜擢されたことが気になっていた様子。こちらが説明するとナルホドと納得してくれた。

幅さんはよく考える人なのだ。2年次に休学をしたが、それも自分について考えるための休学だった。

北海道で生まれ育ち、法律家を夢見て上京。名門中大法学部に入って、初めの1年間は法律の勉強に明け暮れた。

法律に身近に触れることで、だんだん「法律家」という職業を冷静に見るようになると、心の中に迷いが生まれた。そして1年間の休学を決意した。

地元で、コンビニでバイトをしながら、友人に会ったり、自営業を営む父親の姿を改めて眺めてみたりもした。高校卒業後、大学へ行った人、就職した人、フリーターをしている人……。

「世の中にはいろんなヒトがいるんだなぁ」

幅さんは社会を見渡して思った。自分の道も法律家だけじゃない。

大学に戻ってからは、勉強ばかりではなく、バイトをしたり、好きな読書をしたり、ドライブをしたり。焦らず、ゆっくり、自分のペースで。そしていろんなことを考えた。

就職活動は、3年の11月頃からネットでの情報収集が主だった。そして3月に決まった就職先が大同生命。生保は人の命に関わる責任感ある仕事。

「弁護士も法律という手段で人を助ける。法律家に憧れていた入学当初の気持ちを、別の形で生かそうと思っています」

考える人が選んだ道である。

テナーサックスに響く心

経済学部 石田 恵さん

石田恵さんがことし卒業したのは経済学部。それともう1つ。吹奏楽部である。

中学から始めたアルトサックス。しかしなかなか上の大会には出場できなかった。

「くやしくて……」

ほのぼの優しい石田さん、実は負けず嫌いの面もある。そんなわけで、大学選びのポイントは……吹奏楽部が強いこと。

そして吹奏楽部の強い中大に入学。念願かなって入部したものの、アルトサックスの定員はいっぱい。石田さんはテナーサックスで妥協した。

「大学へは楽器を吹くために来た！ そのことに変わりはない」と。夜遅くまで熱心に練習にはげむ日々。親ともめたこともしばしば。でも負けなかった。

そして3年の3月に念願の全国大会入賞を果した。第25回全日本アンサンブルコンテスト（サクソフォーン四重奏）の銀賞に。

欲を言えば、吹奏楽部全体での入賞をしたかったと言う。しかし立派な成績だ。

3年では、渉外を担当。OB会や演奏旅行、夏合宿など、吹奏楽部の行事をリードするハードな役職だ。名刺片手に色々なところを回り、たくさんの人と接した。

この経験が進路選びに大いに影響し、将来石田さんは旅行関係の仕事を希望している。大学卒業後はカナダのホテルの専門学校へ留学予定。そのこともあって今ではバイトに明け暮れる日々。

「うち、ビンボウなんでねぇ……」

でも常ににこやか。石田さんには自信がある。いわゆる就職活動はしていないが、忙しい吹奏楽部で自分について考えたことは多かった。1つのことに夢中になって、逆に自分について多くが見えた。

留学先では勉強の邪魔にならないようサックスは持っていかないつもり、らしい。いやいや、ぜひ一緒に連れてってほしいと熱望すると、

「いやァ、どうしようかな～」

いたずらっぽい笑顔になった。

誠意と熱意みのった「内定」

文学部　星谷真由子さん

「真由子はいつもまわりを楽しませることばかり考えている。マイペースね」とは大の仲良し、Nちゃんの評。「どんなことでも経験してから判断したい。人にいろいろ言われるのはいやだ」とは本人のコメント。女性ながらに豪快さを感じさせる。あるいはおおらかさ。

中大とは幼いころから縁がある。地元が高幡不動で、真由子さんの母親はかつて中大の事務員だったそうだ。よくキャンパスに連れてきてもらったのを覚えている。で、「どうしても中大に入りたかった。中大ならどこの学部でもよかった」。

文学部仏文学科に決めたのも、母親が独身時代にフランス語を趣味で習っていた影響らしい。それほどに、両親とは「ずっと仲がいい」。なにかあると必ず相談した。それは今でも変わらない。

映画を見るのが趣味だという。1カ月に最低10本は見るそうだ。バイトもビデオ屋で働いていた。

就活は本当に苦労した。洋服にずっと興味があってアパレル関係に進みたかった。でも1度は、社長の前での最終面接で落とされた。それが大学4年の7月の初め。かなり落ちこんだ。「自分では絶対に受かると思っていたのに。どうして落とされたのか電話までかけたんですよ」

最後のチャンス。父に相談すると、「就職もまぐれがあるかもしれない。とりあえず、あと半年頑張れ」と励まされた。そんな矢先のことだったという。

7月の終わりに、ファッション研究所から1本の電話が入った。とりあえず、行ってみると「就職決まった？　まだ決まってないなら、うちで働かない？」

内定の瞬間だった。信じられなかった。

実は星谷さんは数回にわたる面接のつど、感謝の手紙をファッション研究所に送っていた。その誠意と熱意が伝わった「成果」にちがいない。おおらかに、「就職辞退者が出ただけですよ。ラッキーだっただけなんです」

やりたいことをやれた

経済学部　竹増太志さん

「人助けをしたいということを子供のころから思っていた」そうだ。竹増さんは情報サービス会社（SE）に就職する。SEは具体的には2つの仕事から成る。プログラムを組み立てるのと、お客さんを相手に営業することだ。竹増さんは人が便利になるシステムを作って人助けをしたいという。

「やりたいことがやれた、という感じかな。計画を立てて勉強をするのが苦手だった。この4年間でその部分をコントロールできるようになったのが一番大きいですよ」

就職活動では仕事に対する思い違いを何度も体験した。苦い経験から、企業の説明会で最低1人は他の学生をつかまえて、話し合うことでイメージのギャップを少しずつ埋めた。その行動力にすこし驚くと、「人間、せっぱつまればなんでもできますよ」と笑いとばす。

勉強のほうで興味を覚えたのは産業立地論。たとえば、農家は麦やねぎなどの作物を作る。そこから運送して市場に運ぶ。企業展開においてその場所ごとの特性をどうとらえ生かすか、を現実の事例を使って研究する分野である。

趣味は読書で、一番のお気に入りはジョナソン・グリーンの『名言なんかふっとばせ』。反語的な格言集らしく、「こころのなかでうまく形にならないものが書いてあって、人生観がだいぶ変わりました」。

大学では空手部に所属。3年の夏には黒帯（初段）もとった。ある年は約40人の中で黙々と練習した。

「まわりと同じ生活をしているにもかかわらず、違う空間に身をおくようなそんな錯覚にとらわれるのがおもしろかったな」

独得の感覚。それもまた竹増さんの個性、と思わせる雰囲気があった。

学部への思い、他大学院への道

総合政策学部　松本太一さん

卒業してなお学びを深めようとしている卒業生もいる。松本太一さんだ。中大を卒業後、東京学芸大大学院でADHD（注意欠陥多動性障害）の子どもたちを家庭や学校でどのようにサポートしていくか、についての研究の道に進む。

総合政策学部で過ごした4年間を振り返って、「これまでの小中高で過ごしてきたどの時よりも密度の濃い時間だった」と語る。

在学中自らの興味分野がさまざまな方面に広がり、途中、大学を辞めて実社会で働こうと考えたこともあったという。しかし4年次になり「教育」の問題と出合った。

「ブレれることなく、これこそずっと研究していこうと思えるテーマでした」

総合政策学部のいたことが大きいようだ。

「たとえ興味分野が変化してもそれに対応できるだけの環境が整っている。いろいろなことを経験して、その中から自分の向いているもの、そうでないものを知ることができた。このおかげで動くことのない1つのテーマに出合うことができたわけですからね」

学部での4年間を懐かしむ姿と共に、学部と自分の関わりについての熱さが伝わってくる。他大学の大学院での研究においても中大総合政策学部で学んだ多角的な切り口で問題に向き合っていきたい、と松本さんは語るのだ。

「学部で学んでいることを本当のものとしていくためには外の世界と経験して欲しい。実際の活動に携わり問題にぶち当たることではじめて、総合政策的に物事にアプローチするということが学べるのだと思う」

総政の後輩へのメッセージである。

「緑の多い中大の環境や総政のフレンドリーな雰囲気も自分の大学生活を豊かにした大切な要素ですよ」とも松本さんは付け加えた。

「働く」は「傍楽」

商学部　萩原裕朗さん

「人の笑顔を見出して信頼に応える――これが自分の目標です！」

熱い。言葉も、まなざしも。

就職先は日清食品。「はじめは機械メーカーへの就職を考えていました。しかし、日清食品の〝社長〟に惹かれてこの会社に決めたんです」。数社の内定を蹴って日清を選んだ。一連の食品会社の不祥事について。

「利益に固執して消費者の信頼を裏切っるのは本末転倒。利益を考える人には、利益がどこから得られるのか、を考えて欲しい。そうすれば、おいしいものを売ることで利益を得る、という結論に必ずたどり着くはずですよ」

大学生活は、ゼミ、サークル中心に過ごした。それに14年間続けてきた祭りのおはやしも。「いろいろな組織に入ることでいろいろな人に出会うことができた。大学には刺激を受ける要素がたくさん転がっています。社会にでて何がやりたいか、をじっくり考えることができました」

ゼミではゼミ長をつとめていた。何事にも積極的。「大学生活をいいものにできるかどうかは、自分が主体的に動くかどうか。待っているだけでは何も変わらない、そう思ったんです」

質問に答える目が本当に生き生きとしている。「いまの結果には満足しています。しかし就職はあくまでも社会人としてのスタートです。スタートに立てば前へ進めるし、自分には進む権利が与えられた、それだけのことですから。将来の自分が輝くために、いまできることを一生懸命努力します」

「はたらく」という言葉は「傍楽」だ、と言う。自分のそばにいる人を楽にさせ、楽しませる。それが働くことの意味、と。「〝後悔役立たず〟です。やらないで後悔するより、やってから反省するほうがずっといい。将来は人に期待されて、信頼されて、感謝される、そんな人間になりたいです」

——小清水克君（以下、小）、佐原直宏君（佐）、清水大志君（清）、濱本賢一君（濱）、吉川直人君（川）、吉田丈治君（田）。本日はよろしくお願いします。

一同　よろしくお願いします。

——みなさんは何がきっかけで会を立ち上げたのでしょうか？

小　大学生活を送る中で他大と比べて、中大って元気ないかも？って思ってました。そんな時、一緒にこの会を立ち上げた澤井先輩と「中大って元気ないと思わない？」という話になったので、周りの元気な友人に「一緒に大学を元気にしよう！」と声をかけたのが会の始まりです。

——みなさんがその「元気」な友人ですね？

佐　僕はOBとの勉強会があるって言われて参加したんですけどね。

濱　あれ？俺は飲み会があるからって誘われたんですけど（一同笑）。

——この会で得たものはなんでしょう？

「皆さんGENKIですかァ」
「中大を元気にする会」理工学部6人組

清　多くの魅力的な学生、社会人の方と接点を持てたことですね。ぶっちゃけ、人生観変わりましたよ。

田　社会人とは普段じゃ会えるチャンスもなかなか無いしね。

濱　その他にも、発言の大切さや仕事の進め方など、社会人なら当然とされていることが身についていないことが分かったことですかね。

川　社会人と関わる機会も多いからね。それだけに運営側としてのプレッシャーもあったけど…。

佐　そうだね。企画、運営の大変さもあったけど、500人集めたときは嬉しかったね。

——それは凄いですね。

川　KPの賜物です。

——KP？？　何ですかそれは？

川　工夫パワー。

田　昨年10月に行った2年生向けの就職活動ガイダンスがよい例ですね。教室全体を面接会場にしたんです。講演者が受験者、学生が面接官という設定で、講演者を採用するかどうか評価してもらいました。これは内定者の面接内容を見ることができて学生にはかなり好評でしたよ。

川　まさにKP！！！

清　自分たちも企画を楽しめないとやってきつくなりますからね。

濱　実際そういう時期もありましたから…

一同　そうだね…（頷き）。

——会の目指す「元気」とは何でしょう？

小　何でもいいんですよ。やりたいものがあって、それに向かってひたすら動いてさえいればそれが元気なんです。そんな人がたくさんいる団体…いや大学でありたいですね。

川　まさにGENKI！！

——で、GENKI路線で皆さんの進路はどう決まりましたか。

清　僕はマスコミ関係に。

濱　SE・コンサルティング。

川　僕はメーカーに入社します。

小、佐、田　僕らは大学院へ進みます。

——では、最後に学生代表の小清水君から一言お願いします。

小　いろいろ経験できたこともよかったけど、一番よかったのは、このメンバーです。みんな、付き合ってくれてどうもありがとう♪

一同　おい、違うよ。自分の為にやってるんだよ（笑）。

◇

◇「中大を元気にする会」（略称：GENKI！！！）

URL　:http://genki.tsym.net/

左から、小清水、濱本、佐原、清水さん

一対一の取材は今回が初めてだった。それも1時間半のインタビューが立て続けに3回。

「いいひとだったなァ～」

そんな余韻に浸ろうとするとあかさずわたしを呼ぶケータイ。次の取材が始まる。

「えーっと、ショ、商学部の……○○さんですね？」

なんて学部違いの失礼もしばしば。

そんなわたしの取材に応じ、さらには進路の相談にまでのっていただいたりした卒業生のみなさん、この場を借りて感謝申し上げます。そしてご卒業おめでとうございます。

江部理恵（法学部2年）

「疑似体験」。取材をしていて思ったことだ。自分がまったく未知の分野の人に話を聞くのは次から次へと興味が湧いてくる。いろいろと質問をぶつける。話を聞くのは大学でも、頭の中はどこか景色が違う。

宇佐美さんは日本のみならず、世界の山にも挑んでいる。自分のやりたいことをやっている人は眼が違う。生き生きとしているのだ。そう強く感じた。

大学生活が終わったころには自分に「これだけは」と思えるものが残っているだろうか。もちろんその答えが出るのはまだまだ先の話である。まだまだ時間はあるはず。ゆっくり、そして確固たるものを見つけたい。

小野光雄（総合政策学部・同）

「自分にとっての中大って？」

こう聞かれたらみなさんはどう答えますか？　自分の所属する学部や部などのコミュニティーと自分との関わりについてはいろいろな答を用意できますが、私自身「大学」という大きな共同体の中にある、一個人としての自分の位置を尋ねられたら簡単には答えられないでしょう。今回の取材で卒業生の皆さんに「中央大学」と「自分」とのつながりなどという問いを投げかけてしまい随分と困らせてしまいました。インタビューさせていただいた方々、ごめんなさい。思い出深い貴重なお話を聞けたことはよい経験になりました。ありがとうございました。

吉野仁美（総合政策学部・同）

〈女子アナとはその局の顔だから、面接の時は顔審査と水着審査があるらしい〉という、巷のウワサの真偽を春から女子アナ・小林さんに聞いてみました。

「さすがにそれはないですけど（笑）カメラテストっていうのは何度もやりました」

今回は、中井さんと菊地さん。お二人の取材をしました。私個人が、マスコミに興味があったので、いただいた情報を見て、希望しました。偶然にもお二人は、全く正反対の就職活動をしていたようでした。中井さんは、多種多様な会社を受けていたのに対し、菊地さんは自分の行きたい会社を絞って受けていました。

取材直前に交通事故に遭ってしまい、足を引きずりながら取材場所に現れた私。「大丈夫ですか？」と、取材をさせていただいた卒業生のみなさんに、かえって気をつかわせてしまいました。

本格的な取材は今回が初めてだったので、新たな発見の連続でした。相手の魅力を引き出すこと、相手の伝えたいことを文章にすることの難しさを、身をもって感じました。

先輩方の将来に対する熱い想いを聞かせていただいて、自分の2年後を想像したりしています。こんな風に胸張って社会に出て行けるかな、と。

ご卒業おめでとうございます！

深尾ちひろ（法学部・同）

……それ、顔の映りをみるってことだから、暗に顔審査なのでは?!　小林さんもとっても美人だし。就職活動って厳しいんだなあ、ううっ。そうそう、小林さんの携帯番号が知りたい方は不肖わたくし、記者Sまでどうぞ。なーんちゃって♪あ、冗談ですよう杏奈さん……。

酒井まりえ（文学部2年）

もちろん就職活動も十人十色、同じものなどありませんが。

この取材を通して、私の就職活動がどんなものになるのか、ある意味楽しみになってきました。どちらの取材も終始緊張することもなく、オフレコの話なども聞けて楽しく実のある体験でした。

関敦子（文学部・同）